

- はじめに
- 地震発生時の学校の状況
- 避難先での状況(当日)
- 避難先での状況(2~4日目)
- 児童の安否確認、被災状況
- 学校再開へ向けて
- 青少年の家での授業
- さまざまな支援
- 被災後の児童の様子
- 調査を終えて

■はじめに

大槌町は、東日本大震災において人口 15,277 人のうち 1,409 人が死亡あるいは行方不明となり、また津波の後に発生した火事による被害も含めて、住宅の 4 分の 3 が全半壊するなど、大きな被害を受け、町役場や県立病院を含め町の中心部が壊滅状態となりました。

大槌（おおつち）小学校（震災時の児童数は 286 名）は、大槌湾の北側にある大槌港の近くに位置し、町役場や郵便局を含む中心街の一角にありましたが、津波による浸水が四階建て校舎（四階はプール）の二階近くにまで達し、さらにその後起こった町の火災が校舎にも及びました。そのため、2011 年 4 月からは、北隣の山田町にある陸中海岸青少年の家（岩手県の施設）を間借りして授業が行われ、同年 9 月 15 日に、大槌町の少し内陸に入った場所にある運動公園内に建てられた仮設校舎に、被災した町内の他の三つの小学校および大槌中学校とともに移りました。

この仮設校舎に移った大槌小学校、大槌北小学校、安渡（あんど）小学校、赤浜小学校の 4 校は、2013 年 4 月に統合され、新生の大槌小学校として出発しました。2016 年には新たに建設する校舎に移動することになっています。2013 年 3 月 27 日に、震災当時の大槌小学校校長であった小野寺美恵子先生（調査時には釜石市立栗林小学校校長）への聞き取り調査を栗林小学校で実施しました。以下、事前に行われた電話でのインタビューも含めて校長から直接伺ったお話と会見時にいただいた研修会発表資料などに基づいて、小野寺校長による談話の形式で調査内容を記します。（聞き取り：日本語教育講座 田村建一）

地震発生時の学校の状況

3 月 11 日午後 2 時 46 分に地震が起こった時、児童のほとんどがまだ教室にいました（2 年 2 組の数名だけが、帰宅のため昇降口付近と校庭にいましたが、すぐに校舎内に引き返しました）。しばらく校長室で地震が収まるのを待ちましたが、一向に止む気配がないため、まともに歩けない中、何とか職員室にたどり着いて緊急放送を流そうとしたところ、すでに停電になっていました。そこで他の 2 人の職員と手分けして各階の教室を回り、すぐに校庭へ避難するよう呼びかけました。

校庭で児童の点呼が始まると同時に、すでに何人かの保護者の方が子どもを引き取りに来るのが見えました。けたたましいサイレンの音のため防災無線の放送がよく聞き取れませんでした。が、「大津波警報」という言葉だけは聞こえました。一刻も早く学校の背後にある城山公園に上がらなければと考えました。そのうち迎えに来た保護者が 30 名ほどに増え、必ずいっしょに城山に登るようハンドマイクで訴える中、担任が児童名簿にチェックを入れながら児童を引き渡しました。

坂道を登って城山公園にある中央公民館まで着くのに 10 分ほどかかりました。町の人たちも車や徒歩で次から次へと避難してききましたので、指揮を取りたくても、雑踏の中で児童を整列させる場所もなく、担任すら集められる状況ではありませんでした。

また、地震直後から、一般の避難者と車が校舎や校庭にどんどん入って来ましたので、その避難誘導のために 3 人の職員がしばらく学校に残らざるをえませんでした。

避難先での状況（当日）

3時23分頃、城山の駐車場付近から、学校に津波が押し寄せるのが見えました。校庭に停めた車が、まるでたらいの中のおもちゃのようにぐるぐる回り出すのを見た子ども達が悪鳴を上げるとともに泣き出しました。また、バリバリという音とともに土煙を上げて次の津波が迫ってくるのも見えました。そのうち町の中に火の手も上がりました。「学校も燃えるの？」と訊いてきた子ども達には、「学校は大丈夫だから」と答えるしかありませんでした。

日没が近づいてきたので、公園内の城山体育館の中に移動しました。館内は自家発電で照明だけは点いていました。午後8時過ぎ、役場職員から「町中が火の海になっており、体育館にも火が回りそうなので、城山を超えて内陸部（小槌方面）へ避難した方がよい」という情報が入りました。しかし、その直後に「小槌側からも火の手が上がっており、ここにいた方が安全」という別の情報も入りました。様々な情報が飛び交う中、保護者とともに山越えする子と、体育館に残る子に分かれることになりました。夜の中を山越えしてもその先に身を寄せられる施設の当てもないことから、本校教職員は体育館に残ることにしました。さいわい、結果として火災は城山までは及びませんでした。

体育館には暖房はおろか新聞紙も段ボールもほとんどなく、中央公民館職員には止められたものの、ステージの袖幕や暗幕を切り分けて、子ども達に与えました。教職員（当日は19名）も着の身着のまま避難したため、お互いに身を寄せ合って一夜を過ごしました。若い教員の中には薄着の人もいて、寒さのため歯をカチカチさせながら耐えていました。夜の間、何度も余震が起きましたが、そのつど地響きのような音が館内によく響きました。その晩の食料は、郵便局員から差し入れられたおにぎりと水だけで、子ども達にだけおにぎりを半分ずつ与えました。

避難先での状況（2～4日目）

翌12日も朝食と昼食はとれず、午後3時頃、教育委員会から玄米おにぎりが1個ずつ支給されただけでした。その間、保護者が次々に児童を引き取りに来て、昼過ぎには残った児童が17名になりました。

情報伝達の手段がまったくなく、暖房もなく、食料や飲料水も不足する中、職員と話し合った末、帰宅できる職員は一時帰宅することになりました。14名が帰宅し、自分も含め残った職員5名と児童は、中央公民館の和室に入ることができました。

町の火災は続いており、津波直後から昼夜を問わず車が爆発する音が聞こえたり、その燃える臭いがしたりしていましたが、その日の夜中に、飛び火によって小学校にも火が付きました。校舎が燃えるのを見ても何の手の施しようもなく、絶望感に襲われました。

翌13日に学校に行ってみると、幸いにも二階にあった校長室と職員室は焼けておらず、食料を探してお菓子やジャム、蜂蜜などを避難所に運びました。児童には少しでも空腹を満たすようコーヒー用の砂糖も舐めさせました。また、学校再開に必要な書類も後日、運び出すことができました。残念なことに、学校にあった防災倉庫は壊された跡があり、中に何もありませんでした。

この日の夜、味噌汁と白米おにぎりが配給されました。この時は受け取る避難者の長蛇の列ができました（中央公民館には最高時に約1000人が避難していたと言われています）。

残っていた児童は14日までに全員が保護者に引き渡されました。最後まで残った児童の親は、施設に勤務しているためになかなか迎えに来られなかったのですが、児童の方は、親が津波に遭ったのではないかと不安を抱き始めたため、そのケアも必要でした。

児童の安否確認、被災状況

14日から、対策本部関係者が和室を使用するため、教職員は再び体育館で寝泊まりすることになりました。15日からは残っていた職員と一時帰宅から戻ってきた数名の職員とで、児童の安否確認のために各避難所を回り始めました。その間、他の小学校に安置されている子どもの遺体確認の依頼が入り、副校長と養護教諭が対応しました。19日には安否不明の児童が3名（内2名は兄妹）いることがわかりました。

この3名は後で死亡が確認されたのですが、この中で1名だけが損傷のない遺体として見つかり、1名は一部のみ、もう1名はDNA鑑定の結果わかりました。3名とも地震直後に迎えに来た保護者に引き渡した子ども達で、その後親とともに他の家族を迎えに行き津波に巻き込まれたと思われます。不明が確認された時が、教職員が一番精神的にまいりました。その時は陣頭指揮を執らなければならない私自身も何も手につかない状況になっていました。

犠牲になった児童の家族も含め、児童の保護者のうち4名が死亡、1名が行方不明となりました。また、児童の住居の被災状況は、全壊が180名、半壊が29名、一部損壊が30名でした。教職員に関しては、身内の死亡が1名、持ち家の全壊が2名、借家アパートの全壊・半壊が7名でした。

学校再開へ向けて

3月16日から、陸中海岸青少年の家へ移動した4月18日までの間、中央公民館3階の厨房を仮職員室として借用し、学校再開へ向けての準備を行いました。3月22日には本校職員が全員集合し、卒業式の日程や内容を確認し、準備作業に着手しました。この時期は、安否不明者を抱え、また報道関係者に追われながら、精神的に不安定な中での業務でした。

29日の午後、保護者や避難者が見守る中、城山体育館のステージのみを使用しての卒業式が行われ、56名の児童が卒業しました（欠席1名）。

4月に入ってからは、新入生の所在確認のための家庭訪問や避難所めぐりを行いました。また、4月11日から15日には、業者からもらったプリントを使って避難所を中心に5か所で訪問学習指導を行いました。これには希望する児童だけが参加しましたが、参加した児童は久しぶりに勉強ができる喜びに大騒ぎしました。

4月20日に中央公民館大会議室で、避難者が見守る中、始業式が行われました。その後、仮校舎となる陸中海岸青少年の家（山田町）での準備作業を経て、25日に青少年の家で入学式が行われ、翌26日から授業が再開しました。

青少年の家での授業

青少年の家は、山田町立船越小学校といっしょに間借りしました。そこには8月18日までは避難者も同居していました。

児童は全員がスクールバスで通学することになりました。バスの運転手が地元の人ではないため、始めは担任教員がバスに乗車し乗り降りの指導を担当しましたが、5月からは担任の教材研究、教材準備の時間確保のため、校長、副校長や担任外の教員がそれを担当しました。

青少年の家では、体育館をパーティションで三つの教室と二つの職員室に分け、その三つの教室を本校の4・5・6年生が使用しました。特別支援教室は段ボールで区切った空間で授業が行われました。1・2年生は研修室を備えつけの仕切りで区切って使用し、3年生は音楽室を使用しました。後に仮設住宅への移動で避難者の数が減るのにとともに、宿泊棟の一部を保健室やことばの教室として使えるようになりました。

体育館の中の教室はお互いの声が筒抜けであり、特に大槌の子ども達は普段からわんぱくな子が多く、ものすごい音をたてましたので、館内に職員室がある船越小学校の先生方にはうるさかったと思いますが、誰も苦情を言う人はいませんでした。体育館にはトイレが男女二つずつしかありませんでしたので、休み時間を学年により少しずつずらすなどの対策もとりました。

さまざまな支援

9月20日からは、大槌町の他の三つの小学校と大槌中学校とともに大槌町内に建てられた合同の仮設校舎で授業が行われました。その後も含めて、この年には全国各地、世界各国からたくさんの支援や励ましが届きました。例えば1学期だけでも、有名な漫画家や、マラソン選手、サッカー選手、また大道芸人やアコーディオン奏者などの訪問があり、普段はできないような体験をすることができました。こうしたイベントは、最初は授業の中で、後には昼休みや放課後に行われました。また、船越小学校にも声をかけ、無理のない範囲でいっしょに行いました。あまりに多くの申し出があり、サッカー選手の訪問が二日続くので片方を断って、後でみんなに恨まれたこともありました。

支援やイベントにはとても励まされる面があるとともに、その対応に振り回され、時間の制約やお礼の仕方など負担に感じられる面もありました。イベントは担当がいいと言った時だけ受け入れました。また、交流したいという学校もありましたが、原則としてお断りしました。支援やイベントは、無理のない範囲で計画的に受け入れるべきであり、時には断る勇気が必要だと考えています。

たくさんの支援物資も送られてきました。あまりにも多くて、なかには子ども達の目に触れないように処分せざるを得なかったものもありました。また、ちょっと疑問を抱くような支援物資もありました。例えば、使ったまま洗われていないパレットが入った絵具道具が贈られてきたことがあります。受け取る側のことが考慮されていないと思いました。また、新品のランドセルが贈られたこともありましたが、そのなかにはB版しか入らないタイプのものもあり、それは使うことができませんでした。

被災した学校には修学旅行を招待する申し出もありましたが、他校と異なり人数的に大槌小学校の人数まで受け入れられないこと、また修学旅行が無料で実施されることが今後も続くことは考えられないことから、本校では食事代にだけ義援金を充てて、あとはもともと積み立てていたお金で実施しました。

被災後の児童の様子

上で述べたような被災状況のため、多くの児童が家を失い、また親御さんが職を失うなど、環境が一変し、不安定な生活を強いられました。これが児童の心に影響を与えないはずがありません。不登校や登校しぶり、幼児がえりの子もいますし、一見元気そうに見えても、心のケアのアンケートを取ると、要ケアの子がたくさんいます。修学旅行の時も、三名で一室に泊まっていた児童が、他のグループの子どもたちと部屋が少し離れているだけで、夜中に怖くなって泣き出し、私のいる部屋に駆け込んできたことがありました。昼間の元気な姿からはまったく想像できないことでした。

教職員も家族が職を失ったり、親戚等に身を寄せたり寄せられたり、住居環境の変化や例年と異なる職場環境の中で、自らが大きなストレスを抱えながら、児童と向き合わなければなりません。教員の行動の中にも、震災時のフラッシュバックが現れたと思われることがありました。仮設校舎での4校合同避難訓練のさいに、児童の出席簿をどこに置くかという件で、自分の主張に異様に固執した職員がいたのですが、本来そうした行動を取るようなタイプの人ではありませんでした。それは震災の翌日、帰宅できる教職員を帰宅させた時に、うっかりチェックした児童の名簿を持って帰った担任がいて、その後の児童の安否確認を名簿なしで行わなければならない事態に陥ったのですが、その時のことが頭をよぎったのだと思われます。

マスコミへの対応も大きなストレスになりました。情報伝達というメリットはありますが、負担も大きく、また正確な情報が伝わらないというもどかしさを感じることもありました。取材に追われ、けんか腰で応じたこともありましたが、しかしそうやって自分の思いを吐き出したことで乗り越えられた面もあると今では思っています。

調査を終えて

以上、震災時とその後の学校再開までの状況、再開後に直面した問題について、小野寺元校長から得られた情報を談話の形でまとめました。特に外からの支援のあり方や児童や教員が抱えた心の傷について、具体例を通して語っていただけたのは、たいへんありがたいことでした。

震災時、情報が遮断され、被災の全体像がわからない中、学校関係者は児童を守ることに専念しなければなりません。もちろん教職員自身にも家族があり、その安否が常に気がかりであったかと思います。小野寺元校長の場合、家族同士で安否が確認しあえたのは震災5日目だったとのことでした。

このような事態に遭遇したときに要求される学校教師としての業務を、家族の側もよく理解していることがたいへん重要だと思いました。

被災地調査レポート Vol. 6

愛知教育大学教育創造開発機構 大学教育研究センター

リベラル・アーツ教育部門

URL : <http://www.aichi-edu.ac.jp/higher-edu/liberal/index.html>

発行日 : 2015年3月27日